

# 『遠のいた幸せは』

岸田奈歩

2,660文字

○あらすじ

散らかった部屋で化粧も落とさず寝る琴子の生活は荒れ果てていた。結婚するつもりだった彼にフラれ何もかもがどうでもよくなり、自分から幸せが遠のいていると思っている。休日に母から祖母の家の掃除をするよう強制され、昔ながらの掃除をしながら祖母と過ごすことで琴子の心に変化が起きていく。

※2ページ目より本編です。

「ふぁ、疲れたぁ」

琴子は玄関で8センチヒールを脱ぎ捨て家に入り、フローリングの床上に脱ぎ散らかした服を踏みつけソファに向かってダイブした。

「明日は休み、もうどうだっていいや」

化粧を落とさなければますます肌が劣化することはわかっている。だが会社の飲み会で気を遣いながら飲んだせいでどっと疲れ、何もかもがどうでもよくなりとにかく眠りたかった。

翌朝カーテンから差し込む真夏の強い日差しで琴子は目が覚めた。スマホを見ると、まだ六時だった。

「喉カラカラ」

昨日飲み過ぎたせいで喉が渴いていた。ソファから転がり落ちるように琴子が気だるく起き上がり、服を踏みつけながら冷蔵庫へと向かい2リットルのペットボトルから水をそのまま飲んだ。胃に水が染み入り酔いが少しずつ冷めていく。

この部屋には二年前引っ越してきた。都心のデザイナーズマンション。家賃は高いがオシャレな家に住んでみたかった琴子は思い切った。大好きな表参道のカフェを真似てソファやテーブルを買った。琴子の収入からしたら大出費だったが、引越し当時は期間限定のつもりだったから大奮発してもいいと思い切ったのだった。三か月前まではカフェのようにシンプルでオシャレな部屋だったが、今は見る影もない。服やリモコンなどがフローリングの床に散乱していた。

「汚い部屋。いつ掃除したんだっけ」

散らかった部屋を見ていたら琴子は泣きたくなくなった。

三か月前に五年付き合っていた彼にふられた。彼は仕事が軌道に乗ったら結婚しようと言っていたのに、軌道に乗ったら他の女を好きになってしまった。私から幸せが遠のいていく、琴子は最近そればかり思っていた。

スマホがテーブルの上でブーブーと震え出した。手にとると画面には「敏子」の文字。琴子の母の名前だ。

「もしもし、何？こんなに朝早くから」

むっとした声で電話に出ると

「朝からそんな声出さないでよ。ますますモテなくなるわよ、ぐふふ」

敏子は電話口でわざとらしく笑った。

「用ないなら切るけど」

「用があるから電話したの。あんた今日暇でしょ。おばあちゃんどこ行って様子見きて」

「はぁ？なんで私が？」

「私、熱出しちゃったのよ。だから私の代わりに掃除してきてよ。おばあちゃん一人暮らしで心配だから」

「そんな元気な声してんのに熱？嘘でしょ」

「うるさい！私は39度もあってしんどいの。おばあちゃん水羊羹好きだから買ってって。じゃ、よろしくね」

琴子の耳にツーツーという音が鳴り響く。敏子は一方的に話すと電話を切ってしまった。

「勝手なんだから。暇って決めつけないでよ」

琴子はスマホのスケジュールを開く。予定は空っぽだった。

「確かに、暇だけどさあ」

スマホ片手に琴子は虚しく呟いた。

デパートで羊羹を買い祖母松子の家の前に琴子はやって来た。古くからある長屋の一戸建て。軒先には簾がかかり、風鈴が風に揺られてチリンチリンと鳴っていた。

ここ数年、忙しいと言い訳して琴子は祖母の家に行っていなかった。久しぶりに会って一体何を話せばいいのだろう。いきなり用事を押し付けてきた敏子を琴子は恨んだ。

どんな顔して会えばいいのだろう。琴子は不安になりながらも玄関の戸をノックし

「おばあちゃん、琴子だけど」

と大きな声を出した。松子は最近耳が悪いと敏子から聞いていたからだ。

戸が開くと同時に松子の笑顔が琴子の目に入ってきた。以前より白髪がうんと増え小さくなった気がしたが、この笑顔は変わらなかった。

「暑い中ごめんね。さ、入って入って」

琴子はサンダルを脱ぎ家の中に入った。ぎいぎいと少しきしむ音がする廊下の先には、畳の部屋が広がっていた。琴子の部屋と違い畳の上には何ひとつ転がっておらず、ちゃぶ台だけがあるすっきりした部屋だった。

「せっかくの休みにごめんね。敏子には大丈夫だからっておばあちゃん伝えたんだけどね」

三角巾を頭に巻き、真っ白でぱりとした割烹着をした松子は心底申し訳なさそうな顔を琴子に向けた。

「いいっていいって。私どうせ暇だからさ。何でも言って」

「ありがとねえ。こんないい孫がいて、おばあちゃんは幸せ者だわあ」

松子の嬉しそうな顔に琴子は少し胸が痛んだ。今まで遊びばかり優先して会いに来なかった孫を見て幸せ者だと言わせていることに、琴子は少し後ろめたさを感じていた。

「お願いしてもいいかな」

松子は部屋の隅にあった箒と塵取りを手に取り琴子に渡した。

「畳の上、箒でさっと掃いて塵取りでゴミを取ってもらえると助かるよ」

「へえ、畳って箒で掃くの？」

掃除＝掃除機と思っていた琴子は箒を渡され驚いた。

「昔は掃除機なんてないからね。箒で掃除してたんだよ」

琴子は箒で畳の上を掃き始めた。掃除機の機械的な音ではなく、箒と畳が擦れるスツスツという音は琴子にとって新鮮であり、気持ちまで清々しくなっていくような気がしていた。

「ありがとねえ。おばあちゃん助かるよ」

「いえいえ。箒で掃除するってすごく新鮮だし、心まですっきりするよ。箒で掃いた後、何かする？」

部屋の中を一通り掃き、塵取りで埃を取った琴子は松子に訊ねた。

松子は袋を手に取り、そこからウエットティッシュのようなものを一枚取り出した。

「最近は便利なものがあるよ」

琴子は松子が持つ袋を見るとそこには「タタミすっきりお手入れシート」と書いてあった。

「敏子がおしえてくれてねえ。昔は雑巾で拭いてたんだけど、絞るのに力がいるだろ。これなら拭いて捨てるだけだから楽だって」

琴子はそのシートを使いやすい大きさにたたんでから、畳の上を拭いてみた。力を入れずにさっと拭けて使いやすい。

「これなら超楽ちんだわ。お母さん、口は悪いけどいいことするね」

「今頃敏子、大きなくしゃみしてるよ」

琴子と松子は顔を見合わせて笑った。

ちゃぶ台の上には、日本茶と琴子を買ってきた水羊羹が並んでいる。軒先からは暮れかけた夕日が差し込み、風鈴が涼し気な音を立てて揺れていた。

「この水羊羹、おいしい。琴子と食べるからおいしいんだな」

松子は嬉しそうに水羊羹を口に入れた。

「私もおばあちゃんと食べるからおいしいんだと思う。それにね」

琴子も水羊羹を口に入れながら微笑む。

「なんだい？」

「箒とタタミシートの今昔入り交じりの掃除、楽しかったよ。また来させてね」

「琴子さえよければいつだって来てよ。こんなことかわいい孫に言ってもらえる私は幸せ者だよ」

「また来て掃除するからどんどん幸せ者になって元気に長生きしてよね」

幸せが遠のいていると思ったあの気持ちは撤回しよう。微笑む琴子は今、私はすごく幸せ者だと思っている。